

黄鶴楼（崔顥）

昔人已に 黄鶴に 乗じて 去り

此の地 空しく 余す 黄鶴楼

黄鶴 一たび 去つて 復 返らず

白雲 千載 空しく 悠悠

晴川 歴々たり 漢陽の 樹

芳草 萋々たり 鸚鵡 洲

日暮 郷関 何れの 処か 是なる

煙波 江上 人をして 愁えしむ

昔人已乘黄鶴去 此地空餘黄鶴樓
黄鶴一去不復返 白雲千載空悠悠
晴川歷歷漢陽樹 芳草萋萋鸚鵡洲
日暮郷関何處是 煙波江上使人愁

解説 作者が武昌（武漢市）の黄鶴楼に登つて作つたもの。

語釈 ※黄鶴楼 武漢市の蛇山の上にある長江を望んで立つ高殿。※昔人 仙人を指す。※余 取り残されてある。※千載 千年。いつまでもの意。※悠悠 是るかたにただようさま。※晴川 晴れわたつた揚子江の流れ。※歴歴 ひとつひとつ見えること。※漢陽 武昌の対岸の町。※萋萋 草の生い茂るさま。※鸚鵡洲 武昌の西南、揚子江にある中州。※郷関 ふるさと。※何処 是れどこがそれなのだろうか。（是）は郷関を指す。※煙波 川の上にたちこめるもや。※使人愁 人を愁に沈ませる。人とは作者自身をいう。

通釈 ここに来た仙人は、すでに黄色い鶴に乗つて飛び去り、今、ここには、黄鶴楼が残されるばかりである。黄鶴は仙人を乗せて去つたまま、もう返つては来ない。ただ、白雲だけが、昔も今も、はるかな大空をただよい流れてゆく。晴れわたつた川の向こうには、漢陽の町の木々がはつきりと見え、眼下の鸚鵡洲には春の草が生い茂る。やがて、日暮れになり、望郷の念にかられて、わがふるさとはいずこ、と眺めたが、川面には、霧がたちこめて定かでなく、私の心は愁いに包まれている。